サイエンスキャンプ2003報告

サイエンスキャンプ2003(主催:(財)日本科学技術振興財団)が、8月6日(水)～8日(金)の3日間、全国の高等学校から高校生を受け入れ、畜産草地研究所で開催されました。

サイエンスキャンプは、豊かな科学的素養を持った青少年を育てていく趣旨をかかげ、研究機関の持つ学習資源を最大限に活用した「総合科学技術体験合宿プログラム」であり、参加者が生活の中にある「不思議」を発見し、科学技術をより身近なものと感じられるようになることを狙いとしています。本年度は29研究機関等が参加する中で、当所も数年ぶりに参加いたしました。

プログラムとしては、A「家畜繁殖コース」(講師:業務第1科・生殖細胞研究室・受胎機構研究室)、B「微生物コース」(講師:消化管微生物研究室)の2つを設け、各3名ずつ計6名(うち男子2名、女子4名)を受け入れしました。

具体的な研修内容として、Aコースは、①卵巣(食肉処理場で採取)からの卵子の採取や卵子の成熟培養に関する実習、②体外受精及び精子の観察と凍結に関する実習、③牛の直腸に手を入れての卵巣や子宮の観察及び超音波診断装置での妊娠診断の見学等を行いました。

家畜繁殖コース:キャンプ最終日。牛の直腸に手を入れての実習

微生物コース:キャンプ2日目。ルーメン細菌の観察

また、Bコースは①牛のルーメンや微生物の働きの解説、②ルーメン細菌からDNAを抽出しPCR手法で特定の遺伝子の検出を行う実習、③人工ルーメンと呼ばれる培養装置の見学、ルーメン内容液で濾紙を培養する変化の観察等を行いました。

さらに、A・Bコース共通として「牛の生態を知る」観点から、実際に自分たちの手で牛乳を搾ってみたり、精液採取の見学を行いました。

今回の受講生は、「牛の子宮を是非触ってみたい」、「直腸に手を入れて内臓をさわってみたい」等、普段滅多に経験できない受講内容に申込当初から大きな期待を示しており、また、牛等の生態や特質を知ることをきっかけに将来へのステップとして何かを得ようと意欲を持って参加している高校生ばかりでした。このため、自分の手で実際の牛などを間近に観察したり、現在、社会的にもクローズアップされている分野における先端的な科学技術にふれることができ、全行程終了の頃には非常に充実した表情とともに、一方でたいへん名残惜しそうな感想も漏らしていました。

今回のキャンプにより、高校生達が自分たちの生活に密着したおいしく新鮮な畜産物が、家畜の先端的な生産技術の開発や品種改良等により成り立っていることを認識し、将来、その奥深さに少しでも関心を持ってくれることをサイエンスキャンプ関係講師、事務局ともに願っている次第です。

(企画調整部　情報資料第1課　岡田明子)

閉講式終了後関係者にて:前列左から2人目～6名が受講生